

大阪のウザ

きっちりと寸法の合う「ジャストフィット」のプラスチック、金属加工部品を作らせたら天下一品。そんなベテラン技術者、新村勝己さん(84)はこの道一筋に半世紀を超えて今も現役で働く。勝己さんが1961年に創業した「マルシン彫刻」(大阪市西区千代崎1)は確かな技術で、価格のみを重視する製品とは一線を画している。「お客さんからの苦情が一度もない」とが誇りだ。13年前に社長を長男勝久さん(53)に譲って会社経営を任せ、自分は会長に退いた。

主要な業務は切削と彫刻によるプラスチック加工。コンピュータの自動制御装置を取り付けた「フライス盤」が正確な寸法で切削し、製品を仕上げていく。「このピツタリ感を見てください」。勝久社長に言われて加工された部品と部品の組み合わせを見ると、日本の良品「クール・ジャパン」と呼ぶにふさわしい精密さだった。

社長と会長を除くと社員4人の小所帯ながら、製品は多岐に及ぶ。デジタル化で姿を消したが、約40年前は生産もピークだった船舶のリーダー

プラスチック切削加工 マルシン彫刻 (大阪市西区)



●機械彫刻の説明をする創業者の新村勝己さん(右)。左は社長で長男の勝久さん●プラスチック加工はコンピュータ制御の「フライス盤」で。右は勝久社長=いずれも大阪市西区千代崎1のマルシン彫刻で



部品。円形のプラスチック盤に刻む角度の目盛りが少しでもずれると船の進行方向を間違える。高度成長の建設ラッシュの頃はテンプレート(製図用具)。少し前までは携帯電話のプラスチック部品の注文が多かった。最近ではディズニのキャラクター商品のモバイル携帯ケース加工の仕事を受注した。ケースに開けるスピーカー用の小さな穴は円形ではなく、夢のある星形にしてほしいという依頼だった。

4階建てビルの1、2階が作業場だ。新しい切削機械の操作は若い社員たちに任せ、勝己さんは年季の入った彫刻機の椅子に素早く腰掛けた。ここが一番居心地が良さそうだ。0・01ミリの誤差が問われる正確な切削・彫刻で最も大事なものは「機械の先端に取り付ける刃物を微妙な仰角を計算しながら自分で作り、メンテナンスすること」。超合金の刃物を触る勝

己さんは、我が子を見るように、いとおしそうなまなざしだ。グローバル化で最近では中国など外国の安い製品に押され、経営は厳しい。勝負するには、品質はもとより納期の早さが物を言う。製品の隅の角度を少し変えるだけで加工工程が減り、コストが下がる。豊富な経験をもとに逆提案をすることによって客の利益にもなり、信頼を得てきた。注文個数は最低1個でも数万個

でも対応する。顧客の幅を広げたいと、勝久社長は最近、会社のホームページを作り、ブログも始めた。まだサンプルだけが、キーホルダーや記念日用の卓上飾りも製品として生産しようとしている。「デザイナーとの連携などで仕事の幅を広げるのが課題です。優れた日本のプラスチック加工技術を受け継ぎ、発展させていきます」。勝久社長が力強く語った。

【高村洋一】

刃の角度絶妙クール!